

第1回自転車利用環境のあり方を考える懇談会での意見(要約版)

問題点

利用環境（ソフト）

- ・朝のラッシュ時、自転車利用者のマナー違反者の多さとそのためによる事故多発。
- ・目的地まで遠く、近くに魅力的な店舗がないため、自転車をあまり利用しない。
- ・自転車利用者のルールの認識が曖昧である。
- ・自転車の種類によって速度差があり、自転車とひとくくりにして道路整備するのは危険。
- ・ママチャリは速度が遅く、なんの手立てもなく車道を走らせるのは危険。
- ・秋田の自転車通勤者は大体5～6kmくらいの範囲の方が多いが、この利用者の距離が伸びないと車から自転車への変換は難しい。
- ・ママチャリでは、5～6kmくらいが移動距離の限界である。
- ・秋田においては自転車と車と歩行者のすみ分けがなされていない。
- ・自転車利用者のマナーが広く認識されていない。
- ・道路を知らないのに、自転車にとって危なくてもそこを通る。
- ・子供に対し、ヘルメット着用の義務があるが、親も認識しておらず、経済的などころもあって認知されていない。
- ・自転車には免許等がないため、規制がないため、マナーが悪い。
- ・自転車は左側走行しなければならないが、右も左も関係なく走行している。右側走行は非常に危険である。

利用環境（ハード）

- ・秋田市においては出会い頭事故と交差点での右折事故が多い。
- ・マウンドアップ方式の歩道が走りにくい。
- ・道路端部の路肩部分が少なく、危ない。
- ・道路のオーバーレイによる高さの積み重ねで、道路端部がなおさら危険になっている。
- ・自転車が走れるスペースが明確でない。
- ・自転車道の認知が足りない。
- ・ヨーロッパでの施策をそのまま秋田に使うのは利用環境が異なるため危険。
- ・歩道の幅員、道路の路肩の幅員が足りない。
- ・新しい道路は歩道幅員があるが既存の道路は幅員がない。利用者のほとんどは既存の道路を利用している。
- ・自転車にとって快適に走れる歩道が急になくなったり途切れたりしている。
- ・明田地下道はいったん自転車を降りなければならないので使いづらい。WEロードは使いやすい。
- ・インターロッキングブロックの歩道は、がたつきやブロックの隙間にタイヤをとられ危ないので使いづらい。
- ・歩道の点字ブロックも滑ったりタイヤがとられたりして危険。
- ・対面通行より一方通行の道路が自転車にとって走りやすい。
- ・「自転車走行可」という道路標識が見つけにくい。見えない。

対応策、改善策

利用環境（ソフト）

- ・ マナー向上、ルール認識のための啓発活動。学習する機会を増やす。
- ・ 自転車利用者に対して比較的安全に走行できる道路の認知度上昇を狙った、自転車走行推奨ルートの作成。
- ・ 自転車利用者に対し、車の免許にあたるパスポートの発行。
- ・ 自転車の楽しさを理解してもらうためのイベント活動。
- ・ 高性能の自転車に乗ってもらうための試乗。
- ・ 自転車利用者に対するメリットの付加。
- ・ 企業が自転車通勤を推奨させる。
- ・ 自転車利用者、車の利用者、歩行者それぞれの信頼関係の構築。
- ・ 秋田市独自の自転車ブランドを立ち上げ、県民市民の意識を変える。

利用環境（ハード）

- ・ 新しい道路は確かに自転車にとって走りやすいし、そうなってくれることにこしたことはないが、そのように全部の道路がなるには時間とお金がかかる。今ある道路の中で走りやすい道路を走らせるのが現実的。
- ・ 自転車にとって走りにくい道路が、車には走りやすかったり、歩行者には安全だったり、障害者には安全だったり、立場によって善し悪しが異なってくる。どこかに偏るのではなく、交通のバランスをとって整備すべき。
- ・ 車、歩行者、自転車利用者のすみ分けのされた道路が必要。これまでのように、ただ自転車を車道に出すとか歩道に上げるという単純な位置づけはこれまで同様自転車にとって走りづらいものである。秋田なりの、その道路なりの独自のルールが必要である。
- ・ 自転車に関する道路標識は、自転車利用者の目線にあったもので設置すべき。